

共生思想とは何か：仏教論の一章として

東海学園大学人文学部 杉山幸丸

The harmonious co-existence with special reference to the philosophy of Buddhism

キー・ワード： 調和のとれた共存、多様性、コミュニケーション、同一地平

Key-Words： Harmonious co-existence, Diversity, Communication, Same-level standpoint

Abstract

“Tomoiki” or “Kyosei” is a basic and most important key-word in Buddhism, particularly in its Jodo-syu branch. I define it as a harmonious co-existence of different people of different personalities, different classes, different cultures, different roots, or different religions, understanding each other. To live harmoniously together with others one should stand on the same level as them. In a university the president must do so with professors and the latter must do so with students. Otherwise communication between them will break down. Standing on the same level one may be able to look at the others’ environment and understand their way of thinking.

はじめに

私の勤務する東海学園大学は仏教精神、とくに浄土宗の教えを建学の精神として設立された。そして、仏教精神に基づく「共生」と「勤儉誠実」が大学のキー・ワードである。このため、「共生人間論」は学生たちにとって避けることのできない必修科目になっている。だから、仏教の共生思想は学生たちの心に深く浸み入るものでなければならないし、各人の生き方の柱になるものでなければならないはずである。

世界は激しく動き、社会・経済情勢が刻々と変化しているばかりか、人々の平穏な日常生活をおびやかすような危機的な事件が頻発し、明日をも知れない状況がその居場所を問わず現出している。一方では、自然科学の発展によって宇宙と地球と人間に関する私たちの知識は大きく広がり、かつ深まっている。根本精神としての仏教思想の基盤は動かないにしても、その表現は時代の動きと知識の深み・広がりには合わせたものに適応しなければならない。さもないと、

それぞれの時代の人々に理解されないだろう。お釈迦さんや法然さんがどんなに立派な人たちだったにしても、後世の人間はその言葉をそのまま、オウム返しのように次の世代に流すだけでこと足れりとするわけにいかないのは当然だろう。自然科学が明らかにした事実にも合う言葉にならないといけない。教え、すなわち基盤そのものだって、常に見直し、練り直されなければならないのである。お釈迦さんの思想を、言葉を、行いを、法然さんが消化して、彼自身の言葉にして伝え歩いたように。

そのような努力が日々なされ続けているだろうか。変動する世界に生き延びられる「共生思想」になろうとしているだろうか。共生や勤儉誠実を言葉だけでなく行動で実行しているだろうか。結論を先に言えば否である。なぜ学生たちに理解されなくなってしまったのか。言葉だけの共生や勤儉誠実になってしまったのか。何が道を誤らせてしまったのか。現状と問題点を明らかにし、「共生思想」を築き直そうとするのが本論である。それが仏教の共生思想と合致することを願って。

1. 共生とはなんだろうか

宗教とはあまり縁のない精神生活を送ってきた自然科学者としての私が東海学園に職を得て、宗教とはなんだろうか、仏教とはなんだろうか、浄土宗とはどんな教えなのか、お釈迦さんや法然さんとはどんな人だったのかと勉強し始めていた頃のことである。浄土宗のある上人と話す機会があった。「生物学でも今、共生は大きなテーマになっているんですよ」と私が話しかけると、彼は「そっち（生物学の共生）はそうかもしれないが、こっち（仏教の共生）はもっと深いんだ」とおっしゃった。あきれて私は二の句が継げず、この会話は気まずい思いのまま、突然、尻切れトンボに終わった。

a. 生物界における共生

私のこれまで専門としてきた生物学、とくに生態学や行動学では、次のような現象、すなわち、著しい支障なく別種の生物が共存している現象を共生（symbiosis）と呼んできた。一方が利益を受けるだけで他方には利害がほとんどない場合が偏利共生（commensalism）、両方に利益がある場合が相利共生（mutualism）である。後者が狭義の共生である。ちなみに、一方が他方から利益を吸収し、相手に多少なりとも不利益をもたらしながら共存する場合は搾取（exploitation）または寄生（parasitism）であり、究極の被害、すなわち殺して食べてしまう場合は（高等動物では）捕食（predation）である（Clarke, 1954）。このうち、相利共生こそがここで問題になる共生の本命であるが、本論では共生をもっと広く考えていきたい。

ちなみに、最近「自然と人間との共生」とか、「環境との共生」、「環境に優しい」などという言葉がよく使われるようになった。これは厳密に言うと、人間による自然環境からの持続的

な搾取状況である（松田、2000）。すなわち、搾取される側の生物や環境が利益を受けるわけでも喜ぶわけでもなく、彼らにとって少しも優しいことはない。人間側が利益を受け続けられる状況を言っているにすぎない。しかし、後述するように、これも広義の共生にふくめておこう。

だれでも知っている生物の共生の例として、ワニとエジプトチドリの話がある。ワニが大きな口を開けて待っていると、チドリがその中に入って歯の間に挟まっている食物のかすをつまみ取って食べる。ワニは歯の掃除をしてもらい気持ちがよいらしい。一方のチドリも餌を得るといふ、双方の利益がある。まちがってもワニが口を閉じてチドリを食べてしまったりすることはない。

ヤドカリとその住処としての貝殻に付着するイソギンチャクの例もある。背負った荷物が増えるのでヤドカリは住まいの運搬に余分なエネルギーを費やすが、捕食者に対するカムフラージュになるという利益がある。他方のイソギンチャクは労せずして水流を起こし、餌を採り入れると同時に移動もさせてもらえる。

これらとは少し違うが、キャベツとその花粉を媒介するモンシロチョウの関係もある。モンシロチョウは花の蜜という食物をもらい、キャベツは授受粉を助けてもらう。アゲハチョウと柑橘類の関係も同様だ。サルはカキの実を食べて栄養摂取をし、一部分でも傷を付けずに種子を飲み込んでくれれば、カキはその種子を遠くまで運んでから肥料付きで播いてもらうことになる。つまり、お互いに利用し合っているのであって、親切心や慈悲心などでは全くない。

こんな具体的、直接的関係だけでなく、自然界の生き物たちは広く、互いに直接あるいは間接に関係しあいながら進化し、多数の種が同所的（sympatric）に生息するようになった。抽象的でおおざっぱな表現になるが、生態系（ecosystem）を構成する生物全体が共生しているわけである。生態系の中にはさまざまなニッチ（niche）があり、さまざまな生物が生息している。ニッチというのは辞書を引くと、彫像や花瓶などを置く棚や壁の凹みと書いてある。物理的な場所はもちろん、そこにある食物の種類やその場所の微気象、さらに他個体の存在も含めた「生きる場を構成する諸条件」である。そこに生きる生物側の機能や役割までも含めて、「生態的地位」と訳されてきた（Odum, 1953）。

環境のわずかな変化がある種の生物の生息数に変化をもたらすと、それを餌としている種や、餌とされている種の生物の行動、さらにそれらの生息数にも変化をもたらし、さらに、さらに、さらに、と連鎖的に変化が引き継がれる。しかし通常は水面に起きた波紋のように、やがて時間的・空間的に少しずつ影響は吸収されて、全体のバランスは平衡に戻る。こうして、生態系は太陽のエネルギーさえ加えられれば、天変地異や人為的改変のような大規模な環境変動がない限り、長期におよんで存続可能な独立系として成立している。最近はやりの表現を使えば、サステナブル・システム（sustainable-system）である。したがって、そこに生息している生

物の各種は、直接間接に互いの存在を保証し合う共生関係にあると言える。つまるところ生物界における共生とは、「調和のとれた多様性の共存 (harmonious co-existence of biodiversity) とその維持機構」だと私は定義している。

生態系の中には、生物種間に食べる・食べられるという食物連鎖関係 (food-chain relationships) がある。食べる側が上位にあり、食べられる側は下位にあると考えられる。また、近い要求を持つもの同士では資源の獲得を巡って競争関係 (competitive relationships) が起きる。競り合いと争いは必然である。ここに強弱の関係が生じる。しかしいずれの場合でも、共生という観点に立ったとき、どれが上だとか下だとか、深いとか浅いとかの概念が入る余地はない。多様なニッチがあって多様な生物が相互に影響しあい、依存し合いながらそれぞれが資源獲得と生存のために切磋琢磨し、生存を成り立たせている。依存し合うために (広義の) 共同作業をすることもある。こうして、その競争と共同を通じた切磋琢磨の努力の中から、新しいタイプの適応様式が生まれることがある。これがさまざまな生物種を生み出した生物進化の多様性につながる。チャールズ・ダーヴィン (1959) が提唱した生存競争 (Struggle for existence) の概念は、まさにこの共存の中の切磋琢磨を指しているのである。

過度の搾取を避けながら相手を利用し、相手にも利用されて、生物は積極的に進化してきた。これを共進化 (co-evolution) という。結果として生物種それぞれの生存が成り立っている。それぞれの活動が全体の平衡を作り出している。もちろん生物の場合、個々の個体がみんなのために生きているわけでは決していない。自分が生き延び、子孫を残すのが生物である。しかし人間だって、基本的には他人のために生きているわけではない。自分と自分の子孫のために生きている。不思議なことに、それでも他人と調和をとろうとする。他人を生かす道が自分を生かす道にも通じると無意識に知っているからなのだろう。バランスを保とうとする力が働くのが共生だろうと、私は思う。大事なことは、共生が決して仲良しや親切だけで成立しているわけではないことである。ぶつかって争うこともあれば、共通の敵に向かって共同して闘うこともある。こうして、地球上の生態系全体を「多種共存を促進する相互作用機構」として、地球共生系と呼ばれることもある (川那部、1996)。

b. 人間社会の共生

ここで分かるもう一つ大事なことは、共生とは同じ地平に立って初めて成り立つということだ。こっちが上だとか、深いとか、高いとか、偉いとか、格が上だとか、そんな立場を維持する限り共生は成り立たない。共生ではなくて、教えてやるとか、恵みを垂れるとか、施しをあたえるというものになってしまう。高みからの考えであり、行動である。これに対して同じ地平に立つということは、人間なら相手と同じ立場に立つことでもある。強者とか、富者とか、賢者とかの立場を捨てることである。これが、本当に相手を理解する基本であり、理解される

ことにもつながるのであろう。

最近、日本でもボランティア活動が盛んになってきたのは、社会にとって大変好ましい傾向である。社会全体が豊かになり、人に余裕ができてきたからだろう。強者と弱者が一緒になって生きていける世界、なかでも、弱者が弱者であることを感じないで生きて行ける社会はすばらしい。しかし、わずかな報酬、あるいは無報酬でサービスを提供してくれるのはありがたいのだが、「やってやる」、「助けてやる」、「恵んであげる」、「タダでやってやるのだから」という意識の消えない人が多いようだ。そんな声がちらほらと聞こえてくる。強者の、富者の、あるいは賢者の立場を捨てきれない人たちのだろう。これではまったく共生にならない。施しであり、慈善事業であり、お恵みである。

慈善事業はキリスト教の得意とするところである。キリスト教は、その教義が世界の中心にある、キリストがいちばん偉い存在であると考えている。だから、野蛮な国の野蛮な人間どもにキリストの教えを広めてやろうという高みからの高邁な思想に基づいて、近代にはアフリカやアジアに大勢の宣教師を送り込み、強力で布教を進めてきた。これが結果として奴隷制度を押し進める先鋒としての役割も果たしたことはよく知られている（小川、2002）。中世にはくり返し中東に十字軍を派遣し、多数の人命を奪い都市を破壊しながら聖地エルサレムの奪還を試みた。時代的な背景を無視して軽々しく歴史に評価を下してはならないが、宣教師も十字軍も命をかけた高みからの崇高な闘いであると、少なくとも当事者たちは固く信じていた。2002年にアフガニスタン、2003年にイラクを征服しようとしたブッシュ・アメリカ大統領もまったく同じ線上を、しかも短絡した形で引き継いでいる。キリスト教は、その布教のためには命も財も惜しまない一方、その基本において自らを高みに位置づける積極果敢な宗教なのである。一種の中華思想ともいえるだろう。いずれ機会があれば宗教論も展開したいと考えているが、当面、石毛（2003）が簡潔に要約しているので参考になるだろう。

2. 仏教の衰退

a. 世襲の弊害

その誕生以来、仏教は自らを高みに置くことはなかったと私は思っている。死ねば誰もが仏になれるという思想は、このことを如実に現している。お釈迦さんはその死の間際でさえ、「こんなところで涙など流してぐずぐずしていないで、畑に行ってお働きなさい」と、弟子たちを促したと言われている。自分が特別扱いされることを拒否してきたのである。だからこそ、お釈迦さんは人々に慕われた。仏教はすべてを包み込む、柔らかな思想と言えよう（山折、1993）。それなのに、葬式のときに思い出す以外、仏教はどうして多くの人たちから見向きもされなくなったのだろうか。

知恩院が壮大で立派なのは浄土宗が徳川家という権力と結びついたからであって、法然さん

の人格や行動とは別物である。寺が立派か大きいかは、うまく時代の波に乗ったか否かであって、宗祖の偉大さと直結するものではないのだ。宗門の外の者から見れば滑稽きわまりないサル芝居なのに本人たちは大まじめで、「こっちの寺のほうが格が上だ」などと言いつけている。寺は金びかの度を増すが、こうして、人の心は仏教から離れていったのだろう。

僧侶が妻帯するのは当然のことと思う。普通の人間の喜びや悲しみ、苦勞を理解するだけでなく、分かち合うことが必要だからだ。大工さんや豆腐屋さんの子どもが家業を継ぐことができるように、寺を息子が継ぐことだって認められてよいだろう。問題は、親の築き上げた有形無形の財産を引き継ぐことは、親の苦勞なしに親の地位につく、そのことの危険さである。2代目社長や2代目議員の持つ危険度に近い。2代目社長は世の中の変化に適応できなければ倒産するだけのことだが、2代目議員は少々事情が異なる。人々にその能力不足を気づかれて落選の憂き目を見るまで、世の中に害毒を流し続けることになるからだ。しかも、時代の動きをいち早く察知して社会の行き先に適切な舵取りをする本来の政治家、すなわち先見の明と人々を納得させるリーダーとしての能力が人を議員に押し上げているわけではない。よく言われるように、親から受け継いだ資金力と知名度と人脈が押し上げているのであり、この仕組みを維持する狡猾さと適当な弁舌さえあれば、いつまでも議員であり続けることになる。つまり、世の中に害毒を流し続けることになる。

b. 共生の欠如

さて、寺の場合はもう少し事情が異なる。僧籍を得るために一応の訓練コースをパスしなければならないにしても、そしてそのコースではかなりの荒行もこなさなければならないにしても、生まれながらの特別な才能が要求されるわけではないだろう。もちろん、仏教の精神を広め伝える人間が秀才である必要は全くない。人格と決断と行動力こそが大切だ。汗する人と共に汗し、苦しむ人と共に苦しむことのできる、すなわち、勤儉誠実を身をもって遂行する精神と肉体だ。それは、努力によって創ることのできる能力ではある。しかし僧侶に限ったことではないが、財産を持つと精神も肉体も怠惰になりやすいのは、勤儉誠実に背を向けようとする、人間がたまねく持っている一般現象である。この落とし穴を自覚し、自らを厳しく律することのできる人間こそ、真に僧侶の資格のある人だろう。でも、そんな人はざらにはいない。しかも、寺の住職の子弟がそうした傾向を強く持っているとは決して言えないだろう。努力で補える能力であるにも関わらず、ここに修復困難な無理が生じ、寺の世襲制度の大きな欠陥が露呈する。

自ら仏教を墮落させ人心を離反させておきながら、檀家が減ったことに危機感を抱き、あるいはもっと積極的に土地の活用という商売っ気をふんだんに発揮して、寺は収入を増やす道を探り始めた。寺の住職が大型霊園、幼稚園、駐車場の巧みな経営者になり、その精神的な高さ

低さとあまり関係ないところで寺の栄枯盛衰が起こった。衣食住を確保し、建物などの維持のために最低限の収入が必要なことはいうまでもない。しかし、収入の道が開けるとそれ以上ほしくなるのが人間の欲だが、その欲を節度ある程度に抑えられるか否かが、勤儉誠実の道を歩めるか否かの分岐点だろう。

浄土宗は徳川家と結びつくことによって、知恩院という立派な寺を持つことができた。しかし、宗祖である法然さんは武士という地位も、さらには比叡山の座主第一候補という輝かしい地位も捨て去り、わらじをはいて貧しい人々の中に分け入ったと聞かされてきた（梅原、2001）。

戦乱に明け暮れ、何万人もの餓死者が続出し、庶民のだれもが将来への希望を失っていた社会で、最も貧しい人たちとともに多くの時を過ごし、その悩みを聞き、救われるべき仏の道を説いたからこそ法然さんは心から人々に信頼され、その言うことは耳を傾けられ、浄土教は日本全国津々浦々に広まったのだろう。法然さんは貧しい人たちと誠実に相対し、共生しようとしたのであろう。それに対して、現代の僧侶の多くが法然さんの行ってきた共生の心も勤儉誠実の行動も失ってしまったことに愕然とせざるを得ないのである（梅原、2002）。

現代の社会で、先祖から受け継いだ寺をわざわざ捨てることはないだろう。しかし、今より一歩でも二歩でも弱者と共生する道を探り、行動すること。弱者を理解し、同じ地平に近づくこと。僧侶のすべき事はそれに尽きるだろう。僧侶たる者が、「こっち（の理論または思想）の方が深いんだ」などと言って自らを高みに位置づけている限り、相手を理解することはできないし、共生はもとより仏教の復興もあり得ない。勤儉誠実こそが、意識せずとも自ずからを弱者の地平に立たせ、共生を実現させるのである。もちろん今日の私にも、尊敬する僧侶はおられる。しかしそれは、寺の大きさや社会的地位などによるのではなく、その人個人の人格によってである。

なお、カトリックだけなのかも知れないが、キリスト教では牧師や修道女は神のしもべと位置づけられて結婚を許されず、ほんの身の回りの必需品以外に私有財産を持つことさえ禁じられてきた。これなら物欲に走ったり世襲などの身内びいきが起こりようもない。妻帯することも財産を持つことも人間としての基本的な権利の一部であり、これを剥奪したことになるが、キリスト教は仏教における墮落を避けることができたとも言えよう。だからこそ、仏教の僧侶は人一倍意識して身辺を清潔にしなければならないのである。

3. 教育の現場

a. 管理する側とされる側

ひるがえって、私の立脚点である教育の現場ではどうなっているだろうか。大学の経営者は管理する立場にあり、教員も学生も管理される立場にある。教員は教育する立場にあり、学生は教育される立場にある。そこでは、教員は管理する立場になる。管理する立場にあるものは

ある種の権限を持っており、強者である。強者がその権限を行使しなければならない機会はしばしばある。

私は経営者になったことはないが、管理される教員として、「経営者は横暴だ」と思ったことは何度もある。一方で、私は学生を管理する立場にある。私の授業科目を選択した学生に単位を与えるのも与えないのも私の権限である。優秀な学生に単位を出すのは当たり前だ。理由もなく半分以上欠席し、試験をしてみたら何も書けない学生には手の打ちようもない。問題は境界線上の学生だ。「この単位はお情けだった。今度は実力で奪い取ってやる」と奮起してくれるなら、単位をあたえる値打ちがあるだろう。勉強しようともせず、ろくに解答できなかったことの自覚も反省もない学生には単位を出さない方が良い。

学生にとっての利益とは何なのだろうか。ぐうたらで過ごしてきた今の時点で取得単位数が増えることなのか。それとも、近い将来の自立に役立つ叱咤激励なのか。学生と同じ地平に立つことの難しさを痛感する毎日である。それでも同じ地平に立ちたいし、立たねばならないと思う。

「先生と言われるほどの馬鹿でなし」という言葉があるが、先生と言われるほど難しい職業は、本当は少ないのだと思う。先生と言われるようになった時ほど、言う人と同じ地平に立つことが難しいからだ。教師が聖職である由縁だ。本来なら、僧侶だってまったく同じはずだ。教師だって僧侶だって、おいしい料理をたっぷり食べたいし、きれいな衣服で身をまといたい。汗を流して歩くより自動車で走った方が楽に決まっている。しかし、ほんの少しだけ余計に我慢し、弱者の立場に立ってみることこそ重要なのではないだろうか。

教職員は自動車通勤が認められていて、学生に自動車通学を認めないのは納得しかねる。つねづねそう思ってきた。女性教員の中には、昼休みに大急ぎで帰宅して赤ちゃんに授乳しなければならない者がいるかもしれない。食事の支度を初めとする家事の多くが女性の負担になっている現状では、通勤時間をできるだけ短縮したいだろう。学生にはほとんどないハンディキャップである。だから、数十台しか収容できない小さな駐車場の割り振りは、教職員か学生かによるのではなく、各自の持っているハンディキャップの大きさ、必要度の高さで決められるべきであろう。結果として教職員が駐車場の大部分を占めることになっても、それは構わない。あらゆる特権をはぎ取って、それでも滲み出てくるもので尊敬される、そんな先生になりたいと思う。

学長や学部長は一般教職員と同じ地平に立つこと。教職員は学生と同じ地平に立つこと。この心構えと行動なくして、共生や勤儉誠実を説く教育は成り立たない。あえて言うならば、学生や教職員たちと同じ地平に立ってもなおかつ尊敬されるような、そんな「長」でありたいものである。そうすればおのずから、教員の教育への情熱はさらに上がるだろうし、学生の誇りはいや増しに高まるに違いない。そして、もっといい大学にしようと奮い立つだろう。

私の勤める大学では、前述のように「共生人間論」が必修である。担当になった教員は学生に共生を実践させる各種の施設をお願いしてまわる。老人施設にしても心身障害者施設にしても、たいていは交通の便のあまり良くない場所にある。担当教員は電車とバスを乗り継いで、それさえもないところは汗をかきかき徒歩で行く。この汗を担当にならなかった教職員が共有しなかったら、そもそも共生はなり立たないだろう。「長」たる者はことさらである。

b. 同じ地平に立つこと

私は長年大学に所属し、自然科学の研究に従事し、多少は世界の同業者にも認められる成果を上げてきた。そして現職に移った。そして感じたこと。それは、私のこれまでのキャリアなどは学生たちにとって何の値打ちもないということであった。私にとって大事なものは、どうやって学生たちにやる気を起こさせるかである。知識が増えることは、勉強することの苦しさを乗り越えることは、単位を取るということ以上に大きな喜びにつながるすばらしい気分が味わえることなのだと分らせることである。自然や社会で起きているさまざまな現象間に、相互の関連があることに気づかせること。現象の表面だけでなく、その流れや環境を見ることによって理解が深まること。何かに集中して一つのことをまとめ上げる快感は、そこに達するまでの苦労を吹き飛ばすほど大きいこと。等々。そんなことを理解させることである。少しだけ背伸びをしてみようと思わせることである。自分にはとてもそんな能力はないと思いながら、試行錯誤の毎日を送っている。こんな大事業にどっぷり浸かるには、まず、自分のささやかな「専門」などかなぐり捨てるところから始めなければならないだろう。

今どきの学生の多くは、必ずしも勉強したいと思って大学に来ているわけではない。そのことについてはすでに書いた（杉山、2003）。そんな学生たちに動機付けをさせることは至難だと思ふ。しかしそれでも、学生の至近的要求、目のニーズにだけ合わせているわけにはいかない。学生の地平に立ちながら、しかも教育する側として、教育のあるべき姿を考える。これが求められているのだろう。そしてその時初めて、私の過去のキャリアの一部が生き返ってくるかもしれない。私は学部内の教員の皆さんに「ご自分の専門を捨てて下さい」とお願いしたが、必ずしも分かってもらえてはいないようである。自分の狭い専門にしがみついていたのでは新しい挑戦はできない。そういうことを言いたかったのだ。でも、近代日本文学だの、英米文学史だのにしがみついていないと生きていけないと、いつまでも自らの力を過小評価している教員がいるようだ。あなたにも私にも、これからでも新しい挑戦のできる能力があるはずなのだ。

これまでのキャリアをかなぐり捨てて学生たちと同じ地平に立っても、それでも「先生」でいられることが大事なのだ。学生たちと同じ地平に立つのだと意識することによって、私にも、大いに収穫があったように思う。同じ平面で勝負をする。これは同格の真剣勝負なのだ。こっ

ちが学生よりたくさん努力しなければ勝てるはずがない。そんな思いで学生に接するようになったからだ。

いま私は、これまで研究し勉強してきたことに比べるとかなりはずれ、かつ、はるかに広い裾野を持った分野の授業をしているので、学生から出された質問にその場で答えられず、立ち往生することがある。専門書をめくっても、どこにも書いてない。お手上げだ。そこで、その道のトップの人にEメールで質問状を送る。国の内外を問わずにだ。「こんな突拍子もない質問で申し訳ないが、」と前置きして尋ねるのだが、「こんな、誰も考えつかないようなことに疑問を抱き、質問をする学生を抱えているあなたが羨ましい」というコメントが付いて返ってくることもある。そんなとき、私はふっと幸せな気持ちになる。そうだ。研究時間がほとんどなくなったのは辛い、私は他人から羨ましがられるような勉強をさせてもらっているのだ。月並みでも、突拍子もない質問でもよいから、どんどん質問してくる学生がもっと増えて欲しいと願う日々である。

しかしながら、じつは、授業中や終了後に「今日の話に何か質問は？」と尋ねるのだが、手を挙げる学生は皆無である。100人を超える学生がいる中では気後れがするだろうと思って、「じゃあ、しばらくここにいますから個人的にでも聞きに来て下さい」と言って、初めて上記のような質問が出てくることもある程度だ。在室中は必ず研究室の扉をいっばいに、冷暖房中でも少しだけは空けておくのだが、訪ねて来る学生は少ない。それでも時々やって来る学生がいるのは、こちらの意志が多少は通じたようだ嬉しくなる。

基本的に立場が違う以上、同じ地平に立つこと、相手を理解しようと努めることは容易でない。まして、特段の努力もしなかったら理解できるはずがないだろう。先に、「上に立つ者ほど下の声を聞こうと努めることが大切だ」と書いたが(杉山、2003)、上に立つ者が一方的にしゃべりまくって、「はい、質問は？」と言ってみたところで、下から声があがる見込みはきわめて少ない。すれ違いに、いや、すれ違っていることさえ分かってもらえていないことに、下はもはやうんざりしているのだ。それでいて、「若い者の声も聞いている」、「毎回、質問を受けている」などと言うのは、上ほど同じ地平に立つことの難しさを理解しない、共生の理解のない上司または教員と言うべきだろう。学部長だからこそ私は自覚し、行動しなければならないと思ってきた。

ついでにもう一つ例を挙げよう。私は、ときどき出席表の裏に授業の改善すべき事柄を学生に書かせている。先日、こんなのがあった。「先生、もっと笑顔で話して下さい」だって。授業中の私語を黙らせるために、携帯電話の使用を辞めさせるために、化粧を辞めさせるために、つい言葉が荒くなる。声が大きくなる。眉間にしわが寄る。一生懸命であることは誰にも負けないつもりだし、ときどきはコマーシャルと自称する余談なども挟み込んで学生たちの気を引く努力もしているが、何か空回りしているのではないかと気になっていたところである。痛い

ところを突かれたという思いでいっぱいだった。一生懸命聞こう、理解しようと努めている学生だけでなく、楽しい授業を望んでいる学生から見たらどうなのか。その視点が私には抜け落ちていたのだろう。私の最大の欠点を鋭く突いた感想だった。これからは、もっと笑顔を増やそう。大リーグの野茂やイチローなら、にこりともせず絵にすることができる。霊長類学の杉山でも、まあまあやっていけるかもしれない。でも、私立大学の教員として生き、学生たちの信頼を得るには、それではいけない。大いなる反省をさせてもらうことになった次第である。

c. 共生の基礎にある多様性

共生現象の成立には生物界から見えてきたもう一つの、そしてもっと根本的な要因があった。それは群集構成要素、つまり種の多様性である。構成要素が一樣なら同一資源を求めて競争だけが先鋭化するところだが、生きる場としてのニッチが多様であり、そこに住む生物種が多様であるために共存が成り立っている。さらに、互いに他者を必要とする、あるいは他者がいてうまく行く共生が成り立っている。共生が必要になっている。

人類はたった一種で、生物界全体に匹敵する多様性を持っているといわれる。まさに一人ひとりの個性が違い、家族や出身地による習慣が違い、国や民族による文化が違う。宗教という文化は、その中の一番大きな枠組みとしてあるようだ。

お互いの違いを認めながら共存を計るところにこそ共生が生まれる。そう口で言うのは簡単だ。軽いつき合いなら気持ちのずれを感じていても受け流すことですむ場合が多い。しかし、生活や人生を賭けた仕事となるとそうはいかない。一生懸命になればなるほど、目標は共有しているつもりでも具体的な方法では違ってくる。違った個性が仕事をするのだから当然だ。そんな場合どうすればよいのだろうか。お互いに目標の共通性を確認し合いながら、それぞれの方法の特徴を認めながら共存させるのが通常行われる最善の道だろう。長所短所を補い合えば、1+1が2以上にもなりうる。そのような道に進むよううまく調整するのが「長」の仕事である。

ときどきは機会を持って共通認識を確認し合いながらも、教育の現場では教員1人ひとりがその個性を通じて学生と向き合っている。そして、世の中にはいろんな現象があり、いろんな考え方があり、いろんな正しいことがある。それらを知った上で自分の判断を下すように実際の教育が進められている。

共生人間論にしたって、いろいろ考えられるはずだ。それぞれの論に長所もあり欠陥もあるだろう。それらが提示され、各人が自分の頭で考え、自分の共生論を築き上げていくべきだ。切磋琢磨しながら、その中で生き残れる共生論をつくりたいものだ。いろいろ知った上で、「仏教の考え方っていいものだ」、と学生たちに受け止めてもらえるならすばらしい。そもそも仏教は、多様性とその共生の思想そのものだったはずである。

4. 職業仏教人の姿

相手の立場の理解

2001年の9月11日。ニューヨークの世界貿易センタービルに2機の航空機が激突し、資本主義のシンボルを跡形もなく崩壊させた。いわゆる同時多発テロである。事件直後の新聞報道はいずれも、テロリストに対する恐怖と憎悪に満ちていたが、やがてひと月もすると、イスラムと言われる人たちをもっと良く知らなければならないという論調が散見されるようになってきた。

9月下旬に入って秋学期が始まった。その最初の授業で私は、なぜこんなことをしなければならぬところまで追いつめてしまったのか、問題は表面に出てきた事件だけでないことをよく考えるように、そう学生たちに話した。

それから数ヶ月経っても多くの団体が、「どんな理由であれ、テロによって強引に自分の意志を通そうとする行為に絶対反対する」という声明を出しつづけた。それぞれの声明文からは、事件の底を流れているはずの、絡み合った糸を解きほぐそうという意志も教養も、残念ながらこれっぽっちも感じられなかった。

アラブ・イスラムは今日、明らかに世界の政治と社会の中で弱者の位置にある。その弱者に属する者の一部が「窮鼠かえて猫を噛む」行為をしてのけた。こんなひどいことをするなんて、関係のない人たちを巻き添えにするなんて、一体どういう事か。なぜなのか。そんな疑問を持つのが常識だろう。たとえ泥縄でも、声明を出す前に少しは勉強すべきではなかったか。ユダヤ人たちによる強引で理不尽なイスラエル建国の経緯。生地・居住地を追い出されて、追いつめられたパレスチナ人たちの悲惨な現状。アメリカ合州国の重要地位を多数握るユダヤ人。そして、一方的にイスラエルの肩を持つブッシュ・アメリカ大統領。せめてそれらの関連性ぐらいは考慮すべきだっただろう。そうすれば、もう少し人間味にあふれた、多様性を大切にす、暖かい声明ができたのではなかっただろうか。仏教ももつれた糸を解きほぐす方向へ、たった一歩でも踏み出してほしかった。テロリストたちだって、あなたや私と同じ人間なのだ。

現代社会における共生とは、ひとまず、弱者の立場に立って考えてみることであろう。宗教人としては、「イスラムを追いつめるキリスト教」の構図を冷静に見つめられるのは仏教人でしかないはずだ。思い上がってもいけないが、それぐらいの自負を持つべきである。

一昨年のこと、学生たちを連れてあるりっぱな、大きな寺を訪問した。学生たちの前に立った上人の説教が始まった。金びかの法衣をまとった彼は、「桜は月に向かって咲く」という話をされた。桜に限らず多くの植物は、太陽光（や気温）の変化に応じて開花をきめる。精一杯明るい方に向かって咲く。だから、この話は科学的事実と反する。でも、あえてどきっとさせるインパクトを狙っているにちがいないと推測した。では、どういう意味があるのだろうか。日陰の人たちのためにこそ咲いているのだ。そんな月並みな内容の話をしたかったのだろうか。

結局、私には説教の真意が分からなかった。単純率直な私は禅問答が苦手だ。まして、今の学生にはまったく通じなかった。そもそも、話している相手がどんな人間の集まりであるかも考えずに、その表現に工夫もせずには、説教者として出直しが必要だろう。

私のような者でも時には講演の依頼がある。聴衆がどんな人たちであるのか、あらかじめ聞いて行くのは常識だと思っている。相手は実業界の人たちなのか、技術者たちか、教育関係者か、子どもを持った親たちか。同じように見える学生でも、文科系の学生なのか、理科系の学生なのか。同じ話をするにしても少しずつ話し方を変え、用語を変え、差し挟む余談を変える努力をする。相手を知ることは、相手を理解することの第一歩なのである。当たり前のことだろう。

職業仏教人の一般的な墮落のもう一つの要因は、外からはもちろん、内部の相互批判さえないようなのだ。これまでは国公立大学がそう言われてきた。少なくとも自然科学は世界的に厳しい相互批判にさらされて研究は大いに進展してきたが、大学の機構は教授会自治の壁に保護されて社会の批判にさらされてこなかった。やっと第三者外部評価だの、部外者を入れた学長諮問機関だのができてきたようだが。しかし仏教は、未だにぬるま湯の中に平気で浸かっているのではなかろうか。外気にさらされる、一般社会と同じ地平に立つこと。それなくして仏教の復興はあり得ないだろう。自滅を待つばかりでしかない。東海学園大学が生き延び、さらに、評価される教育機関になるためには、仏教から縁を切る以外に道がないことになってしまう。それでよいのだろうか。

5. 結論

1. 共生とは相手と同じ地平に立つこと。とりあえずでも、相手の立場に立ってみること。そこから相手への理解が生じ、相手とのコミュニケーションが始まる。自分だけしゃべりまくって相手の言うことを聞こうとしなければ、そもそもコミュニケーションは成り立たない。友だちづきあいだって、異文化理解だって、自分と違う人間と共存する基本は同じことだ。自分を高みに位置づけたり、こっちの思想の方が深いんだ等とおごり高ぶっているのは共生は成立しない。

2. 仏教に慈善は似合わない。法然さんのように、わらじを履いて人びとの中に分け入り、あくまでも誠実に、ともに苦しみ、ともに汗し、ともに喜び、ともに悩むところから同じ地平を分かち合うことができるようになるだろう。大学経営者と幹部、幹部と一般教職員、教職員と学生等、基本的な立場を異にする階層の間にも、互いの立場に立つことによって理解とコミュニケーションが可能になろう。相手の立場に立つということは、上の者から先にしなければならない。そこから共生が始まるのだ。

3. 共生とはただの仲良しをすることではない。多様な個性を持ち、多様な過去を持ち、多

様な現在を生きる個人や家庭や社会、そして文化が厳しく競い合い、利用しあい、ときにはいがみ合ってもみた末に、やっぱり相手と共に生きることこそ自分を生かす道だと気がついたとき、ほんとうの共生の出発点に立てる。異なる階層の人たちが同じ地平に立って切磋琢磨する中から築き上げてこそ、ほんとうの大学ができるはずであり、人々に心の拠りどころとしてもらえるほんとうの宗教が生まれるはずだ。そこにこそ共生がある。

4. いかなる思想も理念もその時代の知識を取り入れ、時代にあったものに磨き続けなければならぬ。多様な共生論をすり合わせ、より普遍的なものを築き上げていく努力が必要だろう。むき出しに仏法を語っても、今の学生は消化不良を起こすばかりだ。学生たちに理解できる言葉で語ることも必要だ。その中に仏教思想を柔らかく包み込んでいく。そんな手法が、今、教育に求められているのだ。

おわりに

早世した私の父の遺骨は納める墓がどこにもなく、40年近くもの間、本山である芝の増上寺に預かってもらっていた。母に手を引かれて何度も通った増上寺の記憶は、まだ私の脳裏から消えていない。仏教の墮落をこのままにしておけないという私の思いは、こうして培われた。最近では仏教ブームだそうである。職業仏教人の精神の退廃を素通りしてブームが進んだら、二度と立ち直れなくなるだろう。これらも、本論を書く動機につながった。だが本論を執筆した直接の動機は、「自分の共生論を言明せよ」との村瀬忠雄学長の指示であった。仏教については浅学の私が、現代の仏教を批判したことについては的はずれな側面があったかも知れない。しかし、仏教を毒してきたのは仏教学だとの見方もあるようだから（山折、1993）、本稿のような試みも仏教の復興の役に立つかも知れないと思い、あえて筆を執った。誤りがあれば率直なご指摘をいただきたい。

草稿の段階で奈倉道隆、宮田光、高野春広、奥田達也の各氏からコメントを受け、ブラッシュアップに役立させていただいた。また、英文は Beverley Lafaye 氏に校閲していただいた。ここに記して感謝する。ただし、本稿の内容、表現のすべてが筆者の責任であることは言うまでもない。

引用文献

- Clarke GL. 1954. "Elements of Ecology". John Wiley, New York & Chapman-Hall, London.
- Darwin CR. 1959. On the Origin of Species by Means of Natural Selection. John Murray, London.
- 石毛直道. 2003. 「サムライニッポン---文と武の東洋史」. 中央公論新社.
- 川那部浩哉. 1996. 「生物界における共生と多様性」. 人文書院.

松田裕之. 2000. 「環境生態学序説」. 共立出版.

Odum EP. 1953. "Fundamentals of Ecology". WB Saunders, Philadelphia. (Pa), (京大大学生態学研究グループ訳. 1956. 「生態学の基礎」. 朝倉書店).

小川了. 2002. 「奴隷商人ソニエ」. 山川出版社.

杉山幸丸. 2003. 弱小私立大学論---今、何をすべきか, 東海学園大学研究紀要 8(2): 1 - 17.

梅原猛. 2001. 「法然の哀しみ」. 小学館.

梅原猛. 2002. 「梅原猛の授業：仏教」. 朝日新聞社出版局.

山折哲雄. 1993. 「仏教とは何か」. 中央公論社.